

大胆練習寫字

北基行 記

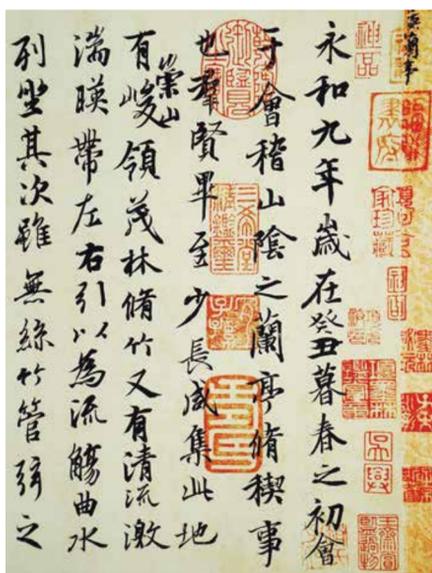
北京 瑤瑤 蔣 茹古齋 書家

習字は大胆に

字がへたで困っています、なおりますか？ この事で、最近多くの青年達が悩んでいるようだ。字がまずい、或いは、書いた字が人に読んでもらえない。この状態なら早く手を打ったほうがよろしい。努力さえすれば改善できるので、悩まなくてもよい。このことをまず若い皆さんに申し上げたい。

それでは、どうすれば字が上手になるか。字を書くまえに、まず書法の基礎知識、執筆から始めて、各種筆法の使い方、このあたりの知識は必要だ。それから書帖を数冊学び、暇をみつけて各種の書帖を眺めるのもよろしい。この外にも、いろいろの意見、方法があり検討してもよろしいが、今回はこの問題をくどくど述べず、重要なことを掻い摘んで述べてみよう。それは、大胆に字を練習することである。

まだ記憶に新しいと思うが、ピンボンの選手が基本打法を身につけると、大練習を経て、たちまち大胆に自己のスタイルを確立した。この経験にはとっても尊いものがある。習字にこの経験を利用しない手はない。即ち、基本筆法を習い、大胆に練習を重ね、いい字を書けるまで、一定期間、一心不乱の練習を重ねることである。



王羲之 蘭亭序 馮承素の臨模 冒頭部分

習い始めに、懸腕と懸肘とは身に付けねばならない。これがキー・ポイントであるが、はさほど難しくない。懸腕、懸肘は、子供であれば、二、三回練習すると使えるようになる。大人は、練習回数を少し増やせば、すぐに慣れる。筆法を覚え、字を書き始めると、あれもだめこれもダメとする戒律があるが守る必要はない。大胆に好きなように、自分の字を書けばよろしい。

自分の字を書くという意味は、なんでもかんでも己の好き放題に書いてもいいという意味ではない。それでは、書いても人が読めない。私の云いたいのは、みんなが同じ字体を学ぶ必要がないということで、各人がそれぞれ特徴を生かして書けばよいという意味である。不思議なことに、歴代の書家は、

なにかといえはすぐ王羲之父子の手本を云うが、右軍父子もその書は自分から創造したのだ。南齊の張融がそ述べていることは筋が通り、的を得ている。《南史》三十二卷《張融傳》によると、“融草書を善くし、常に自ら其の能を美とす。帝曰く：卿が書殊に骨力有り、但し二王の法無きことを恨む。答えて曰く：臣に二王の法無きを恨むに非ず、亦二王に臣が法無きことを恨む……常に嘆じて云く：我古人を見ざることを恨まず、恨む所は古人又我を見ざるなり。”

張融の見解は高明である。彼は王羲之父子の書法を唯一の手本とはせず、書を発展させること、独自の書法を打ち立てることを主張した。これは正しいと思う。歴代の書家全員が前人の書法を死守すれば、如何なる発展も創造もない。そうすれば、中国書法の歴史は行きどまり、後に続く輝かしい業績を期待することができない。

例えば、ご存じの黄山谷の書法であるが、彼の書は宋代では一派をなした大家だ。どうでしょう、黄山谷は前人の

書を死守したとおもいますか。

明らかに、彼は反対してきた。

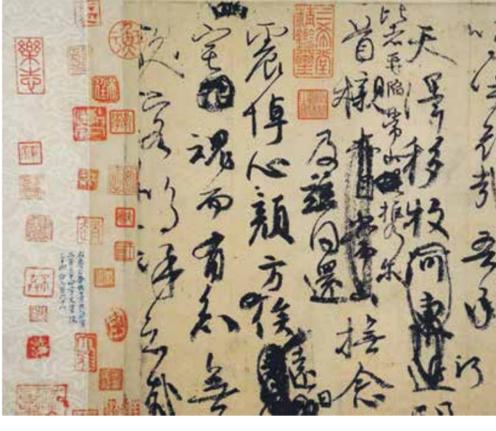
彼の《題幼安弟書後》にこうある。

“幼安弟草を作るを喜び、法を老夫に求む。老夫の書、もと無法なり。但し世間万縁を觀るに、蚊（ぶん）蚋（ぜい）の聚散するが如く、未だ嘗て一事胸中に横たわらず。故に筆墨を扱はず、紙に遇えば則ち書き、紙尽きれば則ち已む。亦工拙と人の品藻譏彈を計較せず。譬へば木人の如く、舞へば節拍に

中り、人その工を嘆す。舞罷れば則ち又蕭然たり。幼安吾言を然りとするや？”

多くの学者が黄山谷の意見に大いに賛成してきた。“老夫の書、もと無法”という言葉は今日まで続き、名言に成った。現代風に申せばスローガンであり、実に創造性に富んでおり、貴重な遺産だ。宋代の大家、晁補之は、その『鵝助集』で述べている、“書を学ぶは法に在り、而して其の妙は人に在り。法は人人を以て伝ふること可なるも、而して妙は必ず其の胸中の独り得る所なり。書工筆吏、精神を日夜に竭せば、尽（ことごと）く古人点画の法を得て而して之を模し、濃纖横斜、毫発すれば必ず似る、而して古今の妙處は已に亡びぬ。妙は法に在らざるなり。”

この意見はすばらしい、もろ手をあげて賛成だ。皆さんに呼びかけたい、この精神で、大胆に字の練習をしよう。



顏真卿 祭姪文稿 真跡 末尾部分

【語句解釈】

・懸腕和懸肘——懸腕と懸肘。毛筆を使う時の執筆法。

懸腕法：手首を机から離して（肘を机につけ支柱とする）使う筆法。

懸肘法：肘を宙に浮かして（当然手首も宙に浮く）使う法。

中国語の「腕」は日本語の「手首」。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

『大胆練習寫字』ひとそえ

ワープロの無かった時代、多くの青年達が悩まされた悪筆克服の課題について、鄧拓は当時の中国卓球が世界を席巻した例を引いて、基本筆法を学び、大胆に練習を積むことで上達に通じると鼓舞しています。書は模倣から始まり創造に到るという進化的な意見を述べた後、「書はもとより無法」と大胆に喝破しています。

この辺りを毛沢東の「和尚打傘」（和尚＝髪が無い＝無髪＝無法。打傘＝傘をさす＝空が見えない＝無天）の無法無天に繋ぐ向きもいるようです。しかし、良く言えば豪放ですが、ある意味で無茶苦茶な生き方を自任している毛沢東と文入党員の鄧拓では無法の意味が異なると思います。

言わずもがなですが、1970年に毛沢東自らが「和尚打傘」と語るのを聞き、「破れ傘を持った孤独な僧」との誤訳を真に受けて世界に伝えたエドガー・スノウの失敗は有名です。

鄧拓の書については、肉筆自序を見ても判断が付きかねます。

そこで「その書がかつて榮寶齋の店頭に掲げられるほどの達筆で、よく人に請われて揮毫していたという」伝聞記載を日原きよみ氏の「鄧拓の詩詞」と題する論文から孫引きするに留めます。

井上邦久



エドガー・スノウの代表作 1952年初版 1962年新版

大胆練習寫字 原文

写字写不好怎么办呢？近来有许多青年朋友因此感到苦恼。字写不好，甚至写出来叫人看不清楚，这种现象当然应该努力克服，而且只要努力，这是完全可以很快克服的，苦恼也大可不必。我以为这一点意思首先应该告给每一个年轻的朋友。

那末，应该怎样努力才能把字写好呢？一般地说来，每个人要学写字，总得知道一些书法地常识，从执笔的方法开始，到各种笔法的运用，大略都要懂得，这是完全必要的。同时，学一两字帖，经常还要多看各种字帖，这些也是必要的。虽然这里头仍有若干不同的看法和做法值得商讨，但是，我现在不打算详细谈论这些问题，而只是想着重地说明最要紧的一件事，这就是要大胆地练习写字。

人们都记得，我国年轻的乒乓球选手曾经在掌握了基本的打法之后，勤学苦练，大胆地打出了自己地风格。这个经验非常可贵。写字也可以运用这个经验。这就是说，要在掌握基本的笔法之后，大胆地练习写字，经过一个时期不断的练习，自然就会写出一手好字。

刚开始练习的时候，必须学会悬腕和悬肘。这是一个关键，然而并不困难。教给小孩子只要练习三次，就完全能够悬腕悬肘，毫不困难；年纪大一些的只要多练几次，也不难养成习惯。至于懂得了笔法之后，写起字来，就不需要一大套清规戒律，以免束缚人的创造性，相反的，必须强调大胆放手，写出自己的字。

写自己的字是什么意思呢？这并不是说自己可以随意乱写，写出来别人完全看不懂。我的意思绝对不是这样的，而是说每个人的字毕竟要有自己的特点，不应该也不可能都学一种字体。奇怪的是，历代讲究书法的人，动辄就以王羲之父子

的书法为范本，殊不知右军父子的书法也是他们自己创造的。倒是南齐张融说的道理，更为透辟。据《南史》卷三十二《张融传》载：

“融善草书，常自美其能。帝曰：卿书殊有骨力，但恨无二王法。答曰：非恨臣无二王法，亦恨二王无臣法。……常叹云：不恨我不见古人，所恨古人又不见我。”

应该承认，张融的见解很高明，因为他不把王羲之父子的书法为唯一的轨范，而主张要加以发展，要独创自己的书法，这是完全正确。如果历来的书法家都死守着前人的轨范，不敢有任何发展和创造，那末，中国的书法的历史早已停止了，怎么能够还有后来的许多辉煌成就呢！

例如，大家都很熟识的黄山谷的书法，在宋代要算是独树一帜的了。试问，黄山谷是死守着前人轨范的吗？显然不是。黄山谷《题幼安弟书后》写道：

“幼安弟喜作草，求法于老夫。老夫之书，本无法也。但观世間万縁，如蚊蚋聚散，未尝一事横于胸中，故不择笔墨，遇纸则书，纸尽则已，亦不计较工拙与人之品藻讥弹。譬如木人，舞中节拍，人叹其工，舞罢则又肃然矣。幼安然吾言乎？”

从来学者都非常赞成黄山谷的这种见解。“老夫之书本无法”这句话长期流传，已经成为名言了。这是富有创造性的口号，至今还值得我们重视。宋代的另一大作家晁补之，在《鵝助集》中也说：

“学书在法，而其妙在人。法可以人人而传，而妙必其胸中之所得。书工笔吏，竭精神于日夜，尽得古人点画之法而模之，浓纤横斜，毫发必似，而古今之妙处已亡，妙不在于法也。”

这是我们完全应该表示赞同的意见。我建议大家按这种精神，大胆地去练习写字。